

(十六) 二等兵材木屋

昭和20年1月頃臨時召集令状が再度来た。配属されたのが東部軍第6682部隊第1旅団第1大隊第2中隊吉本隊、花の東京の守備軍である。3月10日夜遅く、常磐線千住駅近くの国民学校に着した。その夜は仮眠して、翌朝になって周囲を見渡すと、学校の付近数十軒を残し、その外は見渡す限り焼け野原であった。戦災の惨状の激しさを初めて味わった。

「各部隊は、夫々適当な空地に自分の部隊専用の完全な防空壕を作り、空襲に備えよ」との命令が司令部から出された。私は大隊本部指揮班付二等兵の勤務兵であった。重田主計少尉が、教室の教壇の大きな黒板に、管内各部隊から要求された防空壕施設資材の品々を、箇条書きされた。主計が毎日部内を歩き回り調達し、今日は××相済みと、一つ宛消し込んだ。最後に木材調達の項だけが1つ残っている。材木だけはどうしても消えない。日が迫って来て大隊長も心配し、兵隊の身上調査表を各中隊から取り寄せ調査し始めた。「第2中隊陸軍歩兵二等兵小池善三郎、富山県地方木材株式会社理事、日本木材株式会社富山出張所長」主計は驚いた。目の前に木材会社の役員がいるのではないか。

主計は私にお前は明日から材木を買って来いと、命令した。私は主計に、木材は統制品であることや陸軍の各部隊に必要な木材は、陸軍需品本廠を経由しなければ、入手出来ない事を一通り説明したが、飲み込みが難しかったらしい。翌朝早速主計に随行して、牛込の需品本廠へ行った。課長の田中少佐が丁度在席していた。私の顔を見て驚いた。主計に何故規則を守らないかと怒鳴っていたが、最後に山林局へ行き、日本社の備蓄材の中から、特配として出荷する

様指示を頂いた。帰途山林局に行き、担当の小滝技師に依頼して、日本社への指示書を受け取った。翌日、日本社に行き指示書を出すと、当時担当の井出一氏(後に都木連会長)が私の顔を見ると目を細めにつこり笑い「小池君、君は二等兵材木屋か」とあだ名した。備蓄材は大宮駅の先の巣鴨で保管されていた。翌日兵隊30名位引率して、木材を巣鴨へ引き取りに行った。現物を確認すると、主計はどこかへ消え、しばらくするとトラック2台を引き連れて来た。



さすが軍隊である。強引に徴発して来たらしい。6月頃、私等の旅団へ、上野公園の地下に砲兵陣地を作るよう至上命令が発せられた。旅団の最高議会で、私の大隊長は「私の部隊に優秀な兵隊が1人おり、旅団の必要木材は私の大隊で引受ける」と豪語したらしい。夜大隊長室へ私と重田主計が呼ばれ、私にお前は二等兵だから単独の公用外出は許され無いが、旅団長名で公用印章を与えるから関係官庁と交渉して、木材の手当をせよと特別命令

だった。私が積算すると、約2千石になる。防空壕の時の様に百石余では無い。私は彼等に2千石とどの位の量の木材か、説明するのに一苦労した。軍隊では、兵長以下は人間で無い様に考えている。鉄砲や馬の方が私等より大切であった。私等の補充は1銭5里(葉書代)でいくらでも補充がつく。下士官以上になって始めて一人前の人間として待遇する。兵長以下は、日曜日の外出さえ禁止されていた。横穴発掘用材の取得について、

私は作戦を考えた。先ず需品本廠に行き、特別枠の発注願書を提出した。供出県を富山県とした。課長の田中少佐及び水野技官も「お前は富山県木村時代に消費県なるが故に軍の供出材を拒否する為来庁した事を覚えていて。今度の特別枠の供出県を富山県とするのはおかしい。」と強硬だった。私は山林局の一般枠で、その分を増枠願うから差し引き0である。唯、供出県を富山県に願えば、公用出張で帰省する機会が得られるかも知れないと、正直に頼んだら、即

座に「よろしい」と快諾を得た。翌日山林局へ行き、軍用材担当の小滝技師に、富山県へ供出を。一般用材担当の桑田技師に、富山県へ生産県より移入枠を願った。両技師共に、供出材出荷打合せの為、時々帰省出来るよう私の部隊の重田主計に命令すると、厚意或る了解を得た。私は両官庁の厚意に感謝したと同時に日頃の交際は信頼における友情程、大切なものは無いと、今でもつくづく思っている。金銭では無く、真心であると思っ

7月初旬の暑い日だった。供出材打合せの為単独富山市に公用出張が命じられた。私の古巣である日本社で、短時間で打合せを終え勿論午後帰宅した。家の裏の空地を利用して、比較的大きい防空壕を残材を利用して堅牢に作っていた。これならばアメリカの空襲も何ものと、父は自慢していた。私は空襲になると、東京の経験からして、パケツリレーや藁縄で作った火消し棒位では絶対防げ無い。家族全員で家財と共に疎開を勧めた。日露戦の老勇士を名譽に思っている父は、お前達の様な腰抜け兵隊だから戦況が良くなら無いのだと馬鹿者扱いであった。これが父との最後の別れになるうとは、考えてもいなかった。

私の人生に於て、木材と、どうしても断ち切れないものがある様に思う。兵隊に入隊してすら、身は二等兵でありながら、主計将校級の業務を行った。御蔭で毎日荒川河原で、三角爆弾を首から吊し敵の戦車の下敷きになる訓練や一人用のタコ壺掘り訓練には参加し無かったが、私は木材集荷には誠意を持って努力した。先代から材木屋であるという事で、信頼と期待が集まるのか、或は木材以外の企業の事は解らないから、関心も薄くなるのか、いずれにせよ、中途半端な気持ちで他企業へ浮気するより、木材一筋に専念する様な天命の家柄であると思っ